

第5回帯広市総合計画策定審議会第2専門部会 議事概要

1. 日 時 平成20年6月2日(月) 19:00~21:30

2. 場 所 市役所5階フロア一会議室

3. 議事概要

(まちづくりの課題と取り組み基本方向について)

(1) 人口の考え方について

【委員】

人口減少は現実のものであって、国が思い切った政策を打ち出さない限り、歯止めはかからないものと認識している。また、人口自体が減ることよりも、働く人が減ることは、税収の減少につながるため大きな問題であると捉えている。

帯広市においても、自然減を防ぐことは難しいものとする。また、社会増をはかるには、なによりも雇用の創出が必要とする。

30歳代の親子が近隣三町に出て行っている現状をみると、子育てしやすい環境を帯広市の政策として積極的につくれるかが重要である。

また、雇用が増えれば人が集まるということは、都市圏をみれば明らかであり、雇用創出に対して、どんな政策が打てるかということも重要である。ただし、十勝は農村地帯であるから、農産物を加工して売れば生産高が上がるというような、これまでの発想の時代ではないと考える。思い切った企業誘致などが必要と考える。地場産業の発展だけでなく(コールセンターのような)遠隔地でできる全く違う職種についての誘致も積極的にやるべきものとする。

障害者がまちなかで住んで、働ける環境づくりをやっている伊達市や浦河町など、障害者が住みやすいまちづくりの事例があるが、あそこにいけば安心であるという、特徴のあるまちづくりが必要。緑がきれいなまちであるとか、交通が便利なまちなどではなく、生きている人間に対して特徴あるまちづくりが必要であるとする。

宅地については、交通が便利な時代であり、坪10万よりも坪7万を選ぶであろうし、教育費の負担軽減も求められている。これらは、財政と係ることであるが、重点的にこれをやるということについて、市民の同意が得られればできるものとする。

【委員】

「ここで子どもを産んで育てよう」という気持ちになれるまちが求められていると考える。帯広市は、離婚率が高いなど、ひとり親家庭が多いことなどから、こういった人たちに労働をまわしていくことが重要である。

また、帯広が大好きであるという若者は結構いる。こうした若者が帯広に帰ってくる

ことができる環境づくりが必要であると考え。

【委員】

帯広市にとって、「子どもたちをみんなで育てていこう」というアピール力が必要と考える。また、若者の中には、帯広は好きで住みたいという気持ちはあるが、学校がないことや、やりたい仕事がないことなどから、札幌や都会にいつてしまう場合がある。

30歳代で近隣三町に家を建てるのは、マイカーがひとり1台の時代であることから、単純に土地の安い近隣へ出て行っているものと考え。

リタイヤしたあと、都会を離れてスローライフを楽しむなど新しいライフスタイルの実現を求めている人などが確実に増えている。そういった人たちが、十勝で暮らそうとしたとき、町村を選ぶか帯広を選ぶか、こうした人に対するアピールが帯広には必要であると考え。

【委員】

人口について我々が計画策定者視点で議論するとき、将来人口の推計の傾向を受け止めることは必要であるが、この推計値が妥当かどうかということは重要ではない。計画策定の視点においては、我々が望む理想可能な状態と何らかの仮定で見積もられた推計値とのギャップを認識することが計画策定にはまず必要である。

人口推計においては、高位推計、中位推計、低位推計が示されている。中位のレベルで推計値ではなく、高位の人口推計値を帯広市に当てはめ、これを到達点、理想的可能な状態と考える。高位と中位の推計値のギャップをどう埋めるかということについて、年齢区分の3層ごとに具体的な施策は何かということを考え、計画に盛り込むことが実現可能性の高い理想と考える。

【委員】

生きていくためには、生活基盤が重要である。働くところがあっても、給料が安いとか、サービス残業が多いなどの劣悪な労働条件や、非正規雇用が増えており、年収200万円未満の労働人口が全国に1千万人いるということなどが社会問題となっている。雇用は最重点の課題であると考え。

こうした時代において、どうやって安心安全に暮らせるか、どうやって若者が未来に希望を持って生きていけるかということは大きな課題である。若者も高齢者も未来に希望をもてる帯広市にしたいと思っている。高齢化はマイナスのイメージとなるのは寂しいことであり、プラス思考となるようにしたい。

【委員】

農業者の離農がすすんでいる現状があり、離農について食い止めることはできないものかと考えている。鹿追町では、農協の発想で、60歳になったら、農業者は息子に農業

を継いで、自分たちは別の畑でつくったものを売るような取り組みをしている。

親父がいつまでも第一線でやるのではなく、ある時期に来たら、子供の自由な発想にまかせて道を譲り、自分たちは農業に関する別の仕事をするという発想である。

企業誘致の話があるが、大企業の誘致は難しいものがあると考えている。そうであれば、帯広市にとって、農家人口を減らさないことが重要であると考えている。食糧難の問題がクローズアップされており、帯広は、今後も注目をあびる地域と考える。

【部会長】

芽室、音更、中札内、更別の4町村が、十勝の中では人口が増えているという新聞報道があったが、なぜ帯広を離れたのか、原因を精査することが必要であると強く感じている。

また、若者がもっと専門的な知識を学ぶとき、帯広市にはそういった環境が少ないということが課題となっている。大学が、全国的に定員割れしている中で、大学をつくることは、大変難しい状況であると考えていえるが、若者を留める手立ては必要であると考えている。

【委員】

人口の目標数については、数のことだけでなく、夢の部分も含め、現実からすこし高いところに置いたほうがいいという考え方が基本にある。現実には減っていく傾向であることから、それをくい止める策と地域の特性を残すということからいうと、労働人口が15歳から64歳という考えは、帯広はやめて、20歳から75歳とか80歳とかしたほうがよい。労働の質は異なるが、そこを活用する社会の構造をつくり上げる必要があると考える。これについて、帯広市の政策として早めに打ち立てることが必要。

具体的にいうと、年金プラスアルファの労働賃金によって得られる労働の質というのは、これまでの経験を活かしていただくことなどを含め、相当に高いものが得られるものと考えている。

高齢者が高齢者を世話するということは、老老介護を含め家庭では行われているが、これを社会化すべきと考える。高齢者でも元気な人が労働となるワークシェアリングが必要と考える。

農業に関していえば、減るものと考えているが、基幹産業である農業が、食料需要などから、これから注目される産業、または、大事にされるべき産業であると考えている。例えば、帯広市が公社をつくり、離農跡地について買い取り、そこに外から農業をやりたい若者を募って社員として雇うなどといった農業経営を大々的にやり、全国に売り込むことなどをして、今の農地は減らさず、生産性を上げるということが必要であると考えている。

企業誘致については、これまで努力はしてきたが、成果が上がらなかったということは、難しいものであるという認識がある。

もう一点の人口の考え方は、周りの町村の人口が増え、帯広市は減ってもよいが、何かのときは、町村から帯広に入ってくるまじであるならばよいという考え方がある。

例えば文化など、住居は町村にあっても、帯広は必要であると思えるもの、これまでそれが商業圏であったが、今は、音更、芽室など、商業圏は拡散している。商業圏ではなく、帯広市にしかない魅力の部分をもどのようなものとしてつくるかというアイデアを出し合うことが重要。

(2) 土地利用の考え方について

【委員】

郊外に住んでいる人は、そこで生活圏を形成しており、高齢者社会においては、歩いて買い物に行ける範囲内に住居があることは大歓迎である。しかし、帯広市として、これまで拡大していったものを、まちなかにもってくるというコンパクトという考え方が分かりにくい。

また、都市計画のあり方は、損益を伴うことであることから相当慎重であるべきものとするが、帯広の森やスポーツ施設の一部、白樺高校が芽室町にあることや、大谷短大が音更町に移転したことについても、なぜそういった土地利用となったのか市民には分かりにくいものがある。

【事務局】

これまでの帯広市の都市計画の考え方であるが、帯広の森で囲った内側におさめていくという考えがあり、このことは、ある意味ではコンパクトシティの考え方であった。

なぜ今コンパクトシティなのかということであるが、これまでの右肩上がりの時代が終わり、拡大をこのまますすめていくことは、ハードのランニングコスト増にもつながるなど、適切なものではなくなってきていることがある。また、コンパクトシティは、中心市街地だけに人を集めるという極端な考え方ではなく、中心市街地は帯広の顔であり、まちの魅力として大事であるということである。

【委員】

これまで郊外に家を建てて、生活してきた人たちが、近所のコミセンが老朽化してきたとき、コンパクトシティの考え方により整備が行われなかったということはないのかと懸念している。

【委員】

岩内自然の村など、郊外に立派な施設が多くあるが、利用者がほとんどいないのが現状である。施設の利用やPRが必要である。また、道路看板設置など、利用者が使い易くすることが必要。市営駐車場についても同様に空いている。いかに利用してもらうこ

とを具体的に考えていくべき。

【委員】

清流の里については、商業施設の話がすすんでいないようであるが、このことは、住民にとっては、不便であり、住んでいるところで買い物ができ、そこにお金が落ちる環境がよいものであると考えている。

また、「田舎暮らし」は今後、キーワードとなるものとする。愛国や大正ヌブックなど分譲地においては、関東などから移住してきた人もいる。帯広市として、「来て下さい」ということが感じられない。千葉などの民間建設会社が売り出しを行ったところ、すぐに売れてしまったということを知っている。こうしたことは、公としてもやっていくことが必要であるとする。また、愛国などに成功している新規就農者がいるが、新規就農を募る施策も重要なものとなってくると考える。

【委員】

従来の土地利用のやり方は、わかり易くいうと、生活のニーズである、働く場所、住む場所、買い物する場所、楽しむ場所の4つの場所について、生活ニーズを満たす機能分離してそれぞれを拡大して整備するものであった。また、機能分化・拡大に伴う遠距離化対策については、道路等のインフラを整備して移動しやすくするという考え方であった。

こうした考え方が少子高齢化のなかで限界にきて、拡大していったそれぞれの地域に分化せず先ほどの4つの機能(場所)をそれぞれ持たせるのか、それが難しいのであれば、移動しやすくするための新たな手立てをどうするか、または、それぞれの地域の生活ニーズを満たす重層的な空間をつくっていくのか、こうしたことの実策が問われている。

【委員】

高齢者社会において、歩いていけるとところに病院、郵便局、商店など日常生活の用が足せることが基本であるとする。特に公共機関、路線や時間帯などについてはメスを入れる必要がある。このことは、バス会社に任せておいてはならないとする。

人が動かないと経済は活性化しないし、人を動かさないことは、帯広の弱点であるとする。また、小学校、中学校も少子化にともなう空き教室などを高齢者に提供することはできないものかと考えている。

【委員】

自分はバスの利用者でもあるが、バスの本数は減ってきている。これはバスの利用者が少ないためである。採算の合わないものをバス会社に求めても無理がある。このことについて、どうしていくかということが課題である。

【部会長】

以前、『農村に囲まれた都市づくり』という講演を聴いたことがあり、そのときのメモであるが、「土地の良さと農村の良さ、人と人との関係をうまく組み合わせたまちづくり」「まちの中に緑と水があり、緑の共有空間を通して人のネットワークが育っているまち」「歩いていけるところに緑に親しむ場所があるまち」「まちを細かく緑でつつみ、人と人のかかわりを深め合えるまち」「まちなかに歩く楽しみを味わえる道路環境が整備されているまち」これが田園都市であるという内容であった。

このことが帯広のまちづくりにおける田園都市に合致しているかどうか分からないが参考として紹介させていただいた。

また、農村地域、森林地域についての議論がなかったが、山菜採りをする友人たちの話のなかで、農村地帯での家畜ふん尿が、近くの川に影響を与えている現状を聞いている。森林地域においても、同様に不適切な伐採や植林の現状がある。木材価格の低迷などの影響があるうえに、間伐をしないことにより良い木材も採れなくなるなど、悪循環となっていることが懸念される。

【委員】

五期総のときに申し上げたが、多少遠くても広い区画の「帯広らしい住居のつくり方をやるべきだと発言したことがある。

サラダ館をつくったときには、市はドイツまで行って、クラインガルデンの考え方を導入した。市民農園が住居の近くにあり、広がって展開していくのかと期待していたが、尻つぼみとなっており、帯広らしい住み方のできる土地の利用があまり感じられないのが現状である。

たとえば、まちの中心に、空き地が今後できてくるのであれば、まちのど真ん中に畑があってもいいのではないかと考える。そういう生活をしたいという人いると考える。そのほうが帯広らしいのではないかと考える。

【委員】

先ほど、従来の土地利用というのは、生活の機能対応別に区画整理し、あとはアクセスを考えていくものといったが、もっといえば、中心市街地と市街地と郊外（農村部）の同心円的な序列があり、メインにもってくるものが買い物・楽しむ機能の中心市街地であり、中心市街地がシャッター街となり空洞化した場合、なんとかそこに買い物・楽しむ人を集めて盛り上げようという発想になっていると考える。こうしたことがいいのかということの問題提起したのであるが、従来の土地利用の方法と生活スタイルの発想を抜けないと、有している矛盾点を解決せず、先送りすることになるものと考えている。中心市街地をなんとかするというのではなく、少子高齢化における我々の生活の質向上ということをベースとした帯広版のコンパクトシティをやってもよいと考える。

【事務局】

コンパクトシティの発想は、いまある市街地を縮小していこうということや、周辺の市街地に投資することをやめて、中心部に集中させるということではない。

発想の原点は、市街地の拡大を抑制していきましょうということである。これまでは人口の拡大を前提として、市街地を拡大してきたが、人口減少時代に入り、人口が伸びないのに市街地を拡大することは、行政サービスに不効率であることから、人口規模に見合った市街地の形成・維持がコンパクトシティの考え方である。

こうしたなかで、整備された既存の市街地を高度に利用していきましょうという考え方がコンパクトの原点にあって、その手法のひとつに中心市街地の活性化が要素としてある。また、都市の魅力として求心力が必要であり、行き交う人がないとまちの活性化が落ちることから、中心市街地の活性化の手法のひとつとして、まちなかに公営住宅を建設しているということであり、全部を中心市街地にとということではないと受け止めていただきたい。

【委員】

拡大していかないとすると、宅地化できる部分がないと受け取れるが、価格の面で周辺三町と競合できないことになり、三町流出は止められず、人口減につながるなどの影響もあるものとする。

【委員】

コンパクトシティとは都市における生活のインフラをこれ以上拡大しないで、市民の生活を豊かにしましょうということであるとするが、このとき従来の土地利用のやり方と生活スタイルを前提として考えるか、それを崩して、帯広における生活の質とスタイルは何かの根本から考えるか、これが分かれ目となる部分であるとする。

以 上